

地理学における諸理論の統合

The Integration of Various Theories in Geography

後 藤 雄 二*

Yuji GOTO*

論文要旨

地理学の諸理論はそれぞれが地理学的現象を分析する視点を与えている。しかし、それらは完全には独立しておらず、相関関係が存在している。このことに基づき、地理学における諸理論統合の可能性について論じた。その際、諸理論相互の相関関係とともに、地域スケールが重要な役割を果たすことを説明した。

キーワード：諸理論の統合、伝統的地理学、相関関係、地域スケール

1. はじめに

後藤 (1996) は地理学の学問的性格について再検討し、地理学は「空間的な認識の論理」であり、「空間的なものの見方」であることを述べ、地理学の理論化には地域スケールの問題と、形態と機能の関係を明らかにすることが重要であると指摘した。また、後藤 (1995) では、「実験地域」としての青森県について、「現象可能空間」の例として人口分布を取り上げ、分布の類型化を試みた。さらに、後藤 (1998) では、地理学が対象とする地域スケールは、従来の地域スケールよりも、さらにミクロなスケールにまで対象地域を拡げるべきであること、また、そのことにより人文地理学理論の適用範囲がさらに拡大することを指摘した。

このような検討の中で、地理学の理論化をさらに深化・発展させるためのひとつのプロセスとして、諸理論の特性、関係を検討し、これらを統合する視点を導入したいと考えた。このことが本稿の目的である。

2. 「伝統的地理学」の理論

野間 (1963) は、科学的地理学成立の時期についてあらためて吟味を試み、それによってその後の地理学の展開にあらわれた諸問題に、地理学史的な意味を与えようとした。戦後の地理学の動向については、坂本 (1985) が述べるように、いわゆる「新しい地理学」による大きな変化が生じたとされ、さらにマルクス主義地理学や人間主義地理学も台頭してきた。

地理学史を概観すると、相互の関係は当然認められるものの、地理学思想と地理学理論の両面が共存している。これらの中から、地理学理論の部分を抽出し、地理学理論の深化・発展の方向について検討したいと考える。

上述した地理学史について、手塚 (1991) は、「新しい地理学」という見解に対して疑義を述

* 弘前大学教育学部社会科学科教室

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

べ、いわゆる「伝統的地理学」の中にすでに地理学の諸理論が成立しているとしている。筆者もこの立場に賛意を表したいと考えるが、手塚がここで述べている各理論はそれぞれが独立のものとして、地理学的現象をそれぞれの視点から分析するだけでよいのかとの疑問が存在する。そこで、はじめに手塚にしたがって地理学史を概観した後、地理学理論それぞれの特性について検討を加えることにしたい。

手塚 (1989)・(1991)によれば、地理学の歴史は次のようにまとめられる。古代ギリシア・ローマ期に発展をとげた地理学は、その後、中世を通じてヨーロッパでは衰退の時期をむかえた。地理学が再び発展のチャンスをつかむのは、ルネサンスの時代であり、その後、地理的視野の拡大とともに、地球及び地表面についての概略的な説明的記述の試みが次々と現れた。これは、一般社会での地誌的記述に対する関心の高さを示していた。しかし、それは科学的な地理学とはほど遠い状況にあった。このような状況がつづいた後で、18世紀の中葉から、新たな時代が展開し始めた。科学的な地理学の革新を目指す、地理学の革新運動がこれである。その中心はドイツで、19世紀末にいたるまで、地理学の発達に主としてドイツ人地理学者の手で推進された。なかでも、フンボルトとリッターの二人は、学問としての地理学の確立に重要な役割をはたし、近代地理学の父と見なされている。しかし、19世紀初頭に著しい発展を示した地理学は、その後しばらく停滞の時期を迎えた。

このような沈滞を脱して、地理学がふたたび飛躍的な発展をとげたのは、1870年代から第1次世界大戦にかけての時期である。それゆえ、この時期を、近代地理学における第2の変革期と考えることができるという。今日につながる地理学理念の多くが、この時期に端を発している。地理学の歴史、とりわけ19世紀以降の近代地理学の歴史は、異なった立場が共存し、地理学という枠組みの中で多様な学問的伝統が生き続けてきた歴史でもある。学問分野としての地理学の性格づけに関する議論にしても、広範かつ持続的に行われるようになったのは、19世紀末以降のことである。そして、19世紀こそ、学問分野としての地理学が確立した時期であり、科学としての地理学の性格づけが真剣に模索された時期であるという。

アメリカやイギリスを中心に展開された「新しい地理学」の運動、すなわち、この第3の変革期は、1950年代から1980年代にかけて生じ、「新しい地理学」が従来の「伝統的地理学」のパラダイムに取って替わる新しいパラダイムであると主張された。シェーファアの議論は、ハーツホーンの地理学観が例外主義 (exceptionalism) の立場によっていること、および、このような例外主義の立場が非科学的であること、の2点から出発している。このような立場から、一部の地理学者は、科学哲学におけるパラダイム転換論や科学革命論を援用して、「伝統的地理学」の破綻と「新しい地理学」の成立という単純な図式を提示する。このような観点に立てば、19世紀の地理学思想を論じることは単なる懐古趣味に過ぎない。しかし、近年における地理学の潮流は、ここような見方の妥当性に疑問を投げかけているように思われる。むしろ、従来以上にさまざまな立場が、それぞれ積極的に自己主張を繰り広げているのが、現在の地理学の状況であろう。重要なことは、このような立場の違いを認識することであり、その上で議論を深めていることであると述べている。

そして、これらのいわゆる「伝統的地理学」の理論を以下のように整理している。

分布論：地理学を「どこに何が」の学問と規定する。

環境論：自然環境の研究を重視して、それが住民におよぼす影響を研究することが地理学の主

要課題だとする。

空間論：事象の空間的特性（形・距離・面積など）を強調して、そこに地理学固有の観点をみようとする。

景観論：地理学の研究対象を、知覚された景観に限定する。

地域論：場所ごとの多様性と場所相互間の空間的結びつき、さらには同じ場所で互いに結びついている様々な現象間に見られる因果的関連を強調する立場。

以上、手塚の考えにしたがって地理学史と地理学理論について概観したが、次章では以上の諸理論相互の関係について検討することにする。

3. 地理学理論統合の可能性

前章で示した理論は相互に独立したものとして、対象・現象の特性により、分析に際して使い分けるべきものであろうか。これらの理論の相関関係と統合の可能性について検討することが本章の目的である。

仮に、理論間の相関関係が全くなく、完全に独立したものであれば、各理論は地理学的現象に対して異なる視点を与えることになり、どのような理論を援用して地理学的現象を説明するのか、ということは研究者の判断の問題となるであろう。しかし、各理論の間に相関関係が存在し、独立性が弱いとするならば、それらは統合された大理論の中の小理論となり、すべての地理学的現象の説明において、それらは適用に際して強弱の問題として把握すべきものとなるのである。

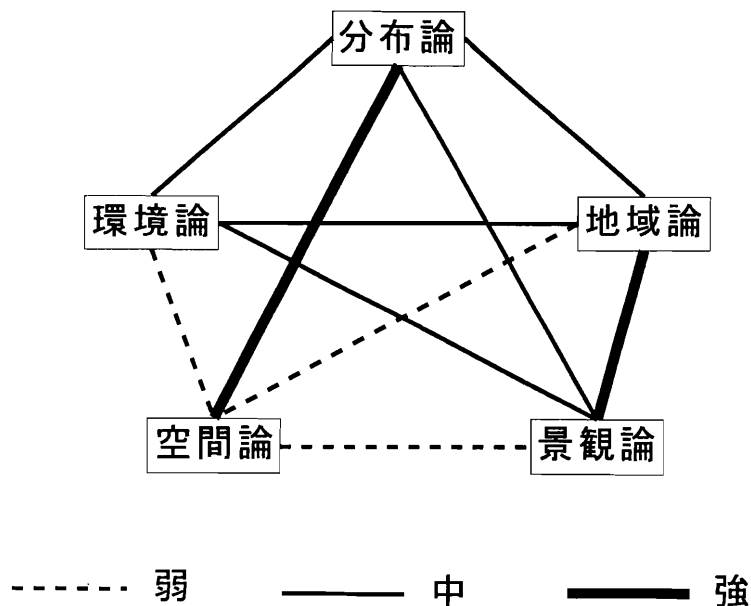


図1 理論間の相関関係

図1は筆者が考察した地理学理論の相関関係の程度を示したものである。分布論は、「どこに何が」あるのかを基本とする理論であるが、これは他のすべてと関連があるものである。すな

わち、環境論、空間論、景観論、地域論との相関関係が存在するわけであるが、その中でも空間論との関係が強いと考えられる。環境論は、この環境を自然環境に限定するなら、景観論と地域論との関係が考えられるが、空間論との関係は弱いと考えられるのである。空間論は上述したように分布論との関係は強いが、形・距離・面積などを強調するという立場から、環境論、景観論、地域論とは相対的に関係は弱いといえるのではなかろうか。景観論と地域論の関係であるが、景観論は知覚された景観に限定する立場であるが、後藤（1998）が指摘したように、地域論とは一見すると異なる立場のように見られがちであるが、実は因果的関連を強調する立場からすると相関関係が強いと考えられる。

次に、これらの理論間の関係について検討するために、「地域スケール」という視点を導入した。地域スケールの問題は、浮田（1970）が強調したように地理学的視点の重要なもののひとつである。このことについては後藤（1998）も重視している。

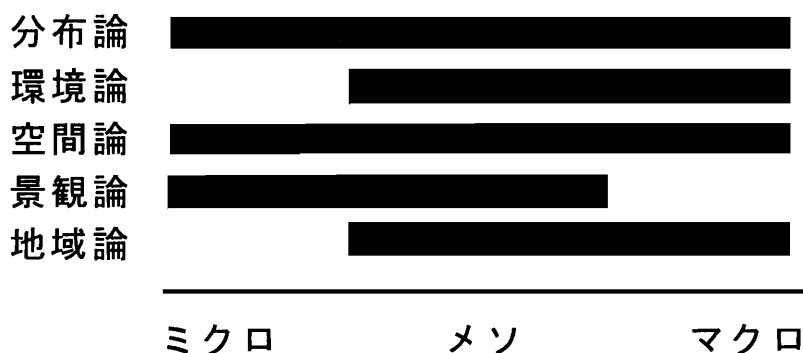


図2 地域スケールと各理論の関係

図2のように、これらの理論は地域スケールをミクロ、メソ、マクロに大別した場合、それぞれが主として対象とするものは、異なっているといえよう。

分布論はミクロからマクロまでの広範な地域スケールを扱うものであり、分布論と相関関係の強い空間論は分布論を媒介として他の理論と関連していくものとする。環境論の環境とは、上述したように自然環境のことを考えている。近年は、ミクロにまでその考察範囲を広げているとはいえ、主としてメソ以上の地域スケールの現象を対象としている。このことから地域の環境から見た概観把握の際の基本的視点を与えていると考える。また、景観論と地域論であるが、地域スケールの点からは考察する内容が異なるようにも考えられ、知覚の方法にも差異はあるものの、後藤（1998）が指摘したように、実際はその中心的方法には大きな差異はないのではないかといえる。

以上のことから、それぞれの理論は独立した理論と考えることはできず、実際には相関関係が存在し、このことから地理学の諸理論を統合していくことが可能であるとする。そして、これらを統合した理論をもとにして、さらに大きな理論を組み立てていく必要があるのではないだろうか。

4. おわりに

従来の地理学研究では、各理論を規定のものとし、どの理論を採用するのが適切であるかと

いう選択がおこなわれてきたように思われる。しかし、各理論の間に相関関係が存在するとすれば、それらを統合していくことが可能であり、地理学的現象の説明において、従来の各理論は適用に際しては強弱の問題となるのである。本稿では、その統合された理論をさらに発展させていくべきであるという方向性を示した。また、実証的研究の立場であっても、後藤(1996)で指摘したように、継続的に理論へのフィードバックをおこなうことが、地理学理論の深化・発展につながることになるであろう。

参考文献

- 浮田典良 (1970)：地理学における地域のスケール——とくに農業地理学における 人文地理 22, 405-419
- 後藤雄二 (1995)：“実験地域”としての青森県における分布の類型化の試み. 弘前大学教育学部紀要 74, 1-8
- 後藤雄二 (1996)：地理学における理論の再検討. 弘前大学教育学部紀要76, 1-5
- 後藤雄二 (1997)：地理学における地域区分. 弘前大学教育学部紀要78, 29-34
- 後藤雄二 (1998)：人文地理学における地域スケールと対象. 弘前大学教育学部紀要80, 1-5
- 坂本英夫 (1985)：戦後の地理学の動向.坂本英夫・浜谷正人編：「最近の地理学」, 大明堂, 1-10
- 手塚 章 (1989)：19世紀の地理学思想史に関するいくつかの見解. 人文地理学研究Ⅷ, 95-109
- 手塚 章 (1991)：「地理学の古典」, 古今書院
- 野間三郎 (1963)：「近代地理学の潮流」, 大明堂
- 野間三郎訳編 (1976)：「空間の理論」, 古今書院

(1999. 7. 30受理)